平成２０年度

中学生・高校生の国際理解・国際交流論文（高等学校の部）

最優秀賞

「現実から目をそらさずに」

福島県立磐城高等学校　１年　阿部加奈子

「これが飲み水です。」

一枚の写真の中には、やせていて男の子か女の子かも分からないような子供が一人。茶色い泥水を汚い容器に入れて、大切そうに両手で抱えていた。その子の目は真っすぐ私を見ていて、逆にこちらが目をそらしたくなるような、「これが現実だ」と言われているような、そんな目だった。ふと気がつくと私はその写真を、その目を凝視していた。目をそらしたくてもじっと見つめていたのは、これをないがしろにしたら、現実から逃げる気がしたからだ。

写真はユニセフのパンフレットの表紙である。飲み水というのは、絶対的に透明でなければならない。しかしパンフレットには、泥水を飲料水としていると書かれていた。水道もない、井戸まではとても歩いて行ける距離ではない彼らには、下痢になって脱水症状になりかねない危険を覚悟してでも泥水を飲むか、何も飲まずにのどの渇きと戦うかの二者択一しかないのだ。

日本では水洗トイレの便器の中の水でも、衛生上問題のない安全な水を使っている。そのような国は、世界の中でも決して多くはない。

日本という国には安全な水があふれている。滅多に水不足を心配することはない。蛇口をひねれば水が出るのだ。かたや、同じ地球上に生きているはずの発展途上国の人々は、安全な水がないだけでなく十分な医療制度や住居も発達していない。また内乱や戦争に巻き込まれた難民たちは、常に命の保障はなく、死と隣り合わせの生活を強いられている。

日本は発展途上国への支援として、他の先進国が人的支援を中心とするのに対し、資金の面での支援を中心としている。しかし、その中でも現地で活躍している日本人がいることを忘れてはいけない。以前テレビのある番組に出ていた医師・中村哲という人の活動に私は感銘を受けた。

中村哲医師の専門は神経内科であるが、パキスタン・アフガニスタンなどの現地では、内科・外科にとらわれない。また医師でもありながら、生きていくためには、とにかく何でも自分の手で、できることは全てやってしまうような人である。

中村哲医師がパキスタンやアフガニスタンで、現地の人々や難民たちの「命を救うために」どうしたらよいかを考えた末に、医療だけでなく、農業指導、水利事業が生まれたという。

しかも、中村哲医師のアフガニスタンでの活動は２４年間も続いている。「今まで辞めて帰ろうと思ったことはありませんか。」という記者からの問いにも「次々とやることが出てきて、そんなことを考える暇が無かったですね。」と答えていて迷いがない。

しかしなぜ、中村哲医師は２４年という長い期間をアフガニスタンに捧げることができたのだろうか。現地の人々の水や食料の援助に行くということは、自らもそのような苦しい状況に身を投じることとなる。日本とは言葉も文化も生活様式も何もかもが違う異世界で他人のために命を懸け、まして、母国である日本の経済援助も受けずに、援助団体を立ち上げて、国際貢献を継続してきた揺るぎない信念の発端とはいかなるものか。

その答えは中村哲医師のインタビューのなかで解き明かされた。からまっていた糸がスルスルと解けていくような感じがした。「ボランティア、ＮＧＯ、国際貢献が上手くいかないとしたら、その理由は何だと思いますか。」という記者からの問いに、「動機が不純だからでしょう。」と単純明快にそう答えていた。

私たちは発展途上国の人々に対して、同情しながらも心の隅では「可哀想」という感情で片付けてしまう。実際私も前述したユニセフのパンフレットを見たとき「可哀想」という一言が最初に頭に浮かんできてしまった。しかし、その時点ですでに彼らのことを上からの目線で見ていることにはならないだろうか。例えば、人ごとのように。例えば、偉そうに。たまたま私達が生まれてきた日本が先進国だっただけで発展途上国の人々を、自分達より下に位置づけることは私達の傲慢でしかない。

中村さんはきっと、発展途上国の人々を「可哀想」という目では見なかっただろう。「可哀想だから助けてあげる」などという気持ちは微塵もなかったはずだ。「命を救いたい」これが純粋な動機だったのだ。

奇しくもこの論文を書き上げた直後に、中村哲医師を代表とする「ペシャワール会」の現地スタッフである、伊藤和也さんが武装集団に拉致されたとの報道があった。

中村哲医師は、以前ＮＨＫのテレビ番組で「自分の好きなことに進んでいき、また、気だてのよい人が良い」と簡単な言葉で、人のあるべき様子を語っていた。まさに、伊藤和也さんのような青年のことであろう。私は、伊藤和也さんが無事に解放されることを毎日願っていたが、最悪の結末を迎えることとなった。

中村哲医師の行動や考え方の始まりは、いつもシンプルな発想からではなかったかという考えに至ると、その大事業とのギャップになぜか胸が熱くなってくるのである。

泥水を飲んで命をつないでいる子供も世界には実際にいる。さらに過酷な状況で必死に生きている子供達が世界中に存在する。それを受け止め、人が人のために生きていることを、そして、アフガンの土地を耕していた一人の日本人青年の死を心に刻もう。

「命を救いたい」。ただそれだけの純粋な動機で突き動かされた、中村哲医師のように当たり前のことが、いつでもどこでも誰に対しても行える人に私はなりたい。現実から目をそらしたら、「今」は何も変わらないから。